

鹿田松雲堂というサロン (稿)

——稀書翫味の交遊圏(二)——

Bibliophiles who gather at the antiquarian bookshop SIKATA SHOUN-DO

山本和明

キーワード 鹿田松雲堂、幸田成友、古典籍

書物流転の軌跡

幕末明治維新という激動のさなかにおいて、書籍はいかに流動変転していったか。このことを考えるとき、当時の言葉として、次の発言にはもっと注目すべきではなからうか。

維新の際は 事すべて創業に属し 古きを棄て、新しきに就く趨勢なるのみならず 兵馬倥傯の折として人士の書を顧みる暇なく 古書の価江戸にては大八車を以て之を計り一輛に満載して僅に何貫文に直し 佩文韻府の如き大部のものすら十五六両(大阪にては百両とぞいひし)に過ぎざりき 東北鎮静し諸藩の士稍々帰陣するに及び 京阪間の書価非常に昂騰し 何の書を問はず需用夥しく 一時製本師は忙殺せられたり 名臣言行録は壹両二分 貞観政要は壹両としてまだ価の貴きをいふものなかりき 世はやうく 静りゆくにつれて 教部省は置かれ諸藩の学問所は

開かるゝに至り 益す販路の広まりたるに 後廢藩置県となりて 忽ち一挫折を来し 諸藩の学校は旧書庫を開いて払下をなしたれど買ふもの殆んどなし 此時に当り唐本類は殊に価なく 真にいはゆる二東三文にだも当らぬほどにて 獲易からざる書さへも多くは清人の手に渡りてこれを惜むものになかりき 当時資治通鑑の売価拾円乃至拾貳円といひしは余程の高価と称せられ 国々にて反故漉きなほしの原料に充てられたりといふ いとく 嘆かはしき至りならずや

明治十二三年に至り各学校の修身科に経書を用ゐられしかば 稍その衰微を挽回せしが如くなりしが 十六七年に至り洋学盛に行はれ その反動によりて又亦古書の価は地に落ち 空しく二十四五年までの間は世の埋木となりたり

右は松雲堂主人「古書の聚散に就て」(『書籍月報』第六十号、明治三十四年四月発行)からの抜粋である。維新という動乱の時代にあつて、書物は何も衰退の一途を辿っただけではなかった。「東北鎮静」

後、一旦書物は高騰したが、廢藩置県による藩校廃止、各学校の修身科の設置、洋学の隆盛などにより乱高下し、結果として再び旧物へと追いやられ顧みられぬものに至ったことなどが確認できようか。

松雲堂と言えば、明治二十三年五月にいち早く自店古書目録「書籍月報」第壹号を刊行（今日の研究では、雁金屋青山清吉に次ぐものとされる）、その後、昭和十年代後半まで目録発行し続けた上方を代表する老舗の古書肆鹿田松雲堂のことである。この場合の松雲堂主人は、古井と称した松雲堂二代静七である。

明治期の古書肆、古書価を巡る先行研究としては、反町茂雄『古書肆の思い出』（平凡社・昭和六十一年／平成四年）があるもの、どうしても大正から昭和期が中心である。明治期に限れば、たとえば水谷不倒『古書研究叢書 明治大正古書価の研究』（昭和八年一月、駿南社）がまず思い浮かぶことであろう。この書冊に掲載される古書価要覽の作成にあたって、「大阪鹿田書店発行の『書籍月報』及び『古典聚目』に、負ふ所が最も多かつた」（同書凡例）と記される。鹿田松雲堂の古書目録がその意味で古書価変遷を伺いうる基礎資料であることは今なお変わらない。それだけではない。一つ一つ証例を挙げるとは控えるが、おそらく不倒は要覽作成ばかりでなく、鹿田松雲堂の自店目録「書籍月報」「古典聚目」に時折掲載されるエッセイ等を利用し、先の書冊を作成したのではなかったか。右の松雲堂主人の文章なども明らかに利用しているようである。

幕末・明治・大正・昭和と、五代に及ぶ古書肆鹿田松雲堂とはいかなる本屋であったのか。のちのち引かれることも多い「書籍月報」第壹号、古井による巻頭言にその姿勢は端的に示されていよう。一部抜萃しておこう。

近來風化の沿革事物の日新に際し古典の尚ふべき人或は之を忘る蟹字横文固より文明なり 韋編緇帙独り開化の妨げならんや乃ち風化の由る所を考んと欲せば古典廢すべからず 百芸の道を明めんとすればそれ豈古典を棄て、何れにか之をもとめん

神社や仏閣、御公家や武家に伝來した多くの古典籍や古文書類は、維新動亂期ならびに西洋文明万能の風潮のなかで、反古同然に焼き捨てられていったものが多い（拙稿「稀書玩味の交遊園（一）」研究論集第二十八卷参照）。そうした古書受難の時代に「百芸の道を明めんとすれば、それ豈古典を棄て、何れにか之をもとめん」との姿勢を貫くことの困難さは想像に余りある。そのうち、第壹号目録発行から十年目にあたりての感慨を述べたのが、先の「古書の聚散に就て」の一文であった。その中で「爾來弊堂の微志を察したまひ年毎に購求の華客を増し嚮の故紙簾中に呻吟せし古書は再び世に出で文士の案頭に上るに至れり 況んや近來公に私に図書館又は文庫の年々に増設せられて古書保存の道は始めて立てり 洵に喜ばしきことならずや」とも記される。十年の歳月で、公私の図書館の建設、「古書保存の道」がもたらされたのだとするならば、鹿田松雲堂などの古書肆の功多きことを思わずにはいられない。古井が大阪の書籍商組合から戴いた感謝状の一節には、「思ふに、他日浪華の文学史を編するものあらば、君の事歴は必ず其幾頁を埋むるならん」と記されていたという。幸田成友は「鹿田静七翁小伝」（『書籍月報』第六十九卷、明治三十八年十一月）でこの逸話に触れ、「決して溢美にあらざるなり」と賞賛するのであった。

海内の読書家、浪華に松雲堂あるを知り、足一たび大阪に入れば、必ず之を訪はざるは莫し、亦榮ならずとせんや、翁人と為り

誠実義侠、酬恩報徳の挙、扶弱輔幼の実、枚挙するに遑あらず、交遊極めて広く、一たび翁を知る者は、皆翁を愛し、翁を重んずと同じく幸田成友の言葉である(同右)。あたり前のことであるが、古典籍の移動は個人から個人への譲渡より古典籍商を介して成立することの方が圧倒的に多い。書物の集まる場所に人々は足繁く通い、情報を共有化していき、書物を購求する。人々の集う求心力となりうるのはそうした場所、トポスの存在であることを考えてみれば、古書肆の存在は重要であろう。古書肆を介して同好の士を知り、集い、研鑽を重ねてゆくのである。かてて加えて「一たび翁を知る者は、皆翁を愛し、翁を重んず」とも表現されていた。二代古井などの人柄そのものも求心力であり、人と人との交流を生み出していったに違いない。

文学史を、単に書物を手にした、あるいは寓目した研究者・好事家の立場からではなく、書物流転、人的交流という観点を加え眺めるとどうなるのか、はなはだ興味は尽きない。「明治から大正にかけての知の趣味家の世界の中で、一度取り上げてよいと思われるのは古書店の店主の演じた役割である。古書店はある意味で、人の集まるところであり情報交換の行われるところである。……古書店(および店主)の世界史のようなものを誰か書いてみるのも一興であろう」とは山口昌男の発言であるが(『内田魯庵山脈』晶文社、平成十三年一月)、書籍流通史、書籍を巡る人的交流の諸相をうかがう上で、欠くことのできないのがその担い手の古書肆、その主人を巡る考察である。本稿もそうした観点からいくつかの事象を考えてみたいのである。

機は熟しつつある。たとえば鹿田松雲堂を巡っても、平成十七年度に「近代大阪の耀き―古書肆・鹿田松雲堂と大阪の雅人文人たち―

と題し、大阪府立中之島図書館で関係資料展示がなされた。そのおりのリーフレット(平成十七年七月六日、同館発行)に示された個人蔵資料などは、その解説をみる限りでも、今後、その当時の人的交流や古典籍の流転などを考察する上での基礎資料となることが容易に推察できる。また近時鹿田松雲堂四代静七長女で、相愛高等女学校出身の故四元弥寿氏による鹿田松雲堂史『なにわ古書肆鹿田松雲堂五代のあゆみ』(和泉書院・平成二十四年十一月)も刊行された。稿者もその編輯にたずさわったが、一部翻刻された三代静七こと餘霞の日記には、人々の交流、書籍入手に関する貴重な情報が満ちあふれている。どういった経緯で書物が市場に出され、どういった経緯をへて玩味する現所蔵者のもとへと収まったのか、許容される範囲で考察対象とすることにより、資料保管にかけた人々の思いを継承することへ繋がるものと思ふ。

もちろん限界もあろう。今回の考察では、いま公となつている資料、たとえば新聞や雑誌記事、書籍に翻刻された資料から明らかとなる範囲に限定し、二代古井、三代餘霞の時代を中心に考えてみた。「近代大阪の耀き」リーフレットに拠れば、「保古会書類綴」「書田会記録」などの記録も個人蔵で残されている由。餘霞日記もごく一部のみ公刊されたにすぎない。したがって今少し深く考察を加え修訂していくことも、今後しかるべき時期においてなし得るに違いない。表題にあえて「稿」の一字を加えた所以である。公刊されたものとは言葉、これまでの一元的情報、たとえば水谷不倒の著作などで確認してきた事柄も、新聞等に残された記事や発言などを加えることでより一層多面的に具体的に分かることも多い。以下、資料的価値を鑑み、具体的な文章を出来るだけ引用しながら、眺めていきたいと思う。

西鶴本をめぐる人々

一例として、西鶴本に関する事例を紹介しておこう。この取引は、これまでも水谷不倒『明治大正古書価の研究』「城ノ崎温泉貸本屋の蔵書」と題し呈示されていたものである。

明治三十七年の冬、但馬城ノ崎温泉の某貸本屋（旅館が兼業してゐた由）或者の甘言に誘惑されたとかで、其蔵書全部を大阪に持出し、之を売却しやうとした。所が日露戦争中、不景気であつたから、容易に売れず、折しも暮にさしかかり、関係者は持余したとか云ひ、某書肆が予に其目錄を示して買へと勤めた。一見するにわれ／＼畑のもの多数あり、試みに価を問へば、二百円也といふ。勿論金はなし。又不用もの多く、其処分等を考へると、濫りに手を出す訳にも行かず、體よく断つて了つたが、そんな事が知れたのか、程なく此書は片付いて、結局鹿田書店の手に入つた。鹿田では、此書を処分する方法として、翌三十八年一月廿六日、大阪書籍商組合事務所に於いて、正札即売会を開き、と云つても一般の人を迎へるのでなく、われ／＼同好者、即ち其頃鼻息の荒い本好き六七人を招いて一覽に供した。当日集まつた人々は、幸田成友、今井貫一、濱和助、永田有翠、水落露石、私などの定連が六七人、其頃の軟派は、大阪では永田氏と私と二人であつたから、此内の主なるものは、大概二人で分けて了ひ、残つたものが若干図書館に入つた位で、跡で大笑ひした事がある。（水谷同書一〇八頁）

当事者の水谷不倒が「跡で大笑ひした事がある」というが、鹿田松雲

堂にとつても、この明治三十八年の西鶴本を巡る取引は、のちのちまでに語りぐさとなるものであつた。昭和の御代を迎えても、三代静七こと餘霞が読売新聞紙上にこの西鶴本取引を語るのである。読売新聞「読書界出版界」欄に「紙魚の跡 滲尽しの巻」と題して記載されたのは昭和三年八月二十九日から三十一日にかけてのこと。関連する記事も興味深く、併せて引用しておく。

西鶴本で思ひ出すのは、山陰の名温泉城崎の貸本屋中屋甚右衛門の蔵書売払ひの時のことです（明治三十八年三月）中屋は当時名古屋の大惣（大野惣兵衛）と共に知られた大貸本屋でしたが時代の推移で商売が成り立たず廃業（明治三十三年廃業）しましたが、さすがは湯治客相手の貸本屋だけに好色本は始め八文字屋本、音曲本、芝居本、浄瑠璃本など、わけでも西鶴の好色本は逸品を網羅してゐましたが、今日千金を投じて尚ほ得難い等の好色本がその時は高いといつても十円と超しませんでした

西鶴本の話をもう一つ。これは明治二十三年頃の前回に申した古書受難時代のお話ですが、大阪の或紙屑問屋に中国筋から持込まれた紙屑の山の中から「好色五人女」の揃ひがひよつくり出て来たので之を見つけたセドリ屋が早速引抜いて値踏みをしたところ、屑屋おやぢが面倒臭がつて、そんなに欲しいなら紙屑山と一緒に買ったら何うだと難癖をつけ、其儘お流れになつてしまひました、勿論紙屑ごと買ったところで一円か一円五十銭位のものだつたのです。（読売新聞昭和三年八月三十日条）

城崎温泉に大惣に匹敵する貸本屋があつたことは寡聞にして知らなかつた。また当時の西鶴本の値踏みを知りうる点でも興味深く、不倒の記述を補うものとなっている。併せて、餘霞日記より関連する記事を

引用しておこう(『五代のあゆみ』一八三頁)。

一月廿一日 旧冬十二月七日一見の但馬貸本屋齋藤甚右衛門の古本の御受取 十数度仲人の内へ行 種々数々交渉に交渉を重ね今日遂に手を拍つ 合計二百卅円 外に口料十二円 随分高値なれど軟きものにて当時向の物多く大奮発して買入る也

「二月」廿六日 過日買入れの唐本及軟きもの陳列 今井、永田、幸田、水谷、小山田、内藤、磯の、濱、水落の諸氏来らる 軟きもの大方売尽す(明治三十八年要用日記)

情報を整理しておきたい。貸本屋中屋こと齋藤甚右衛門より譲りうけた書籍の代価は二百三十円、その仲介料十二円。この書冊は明治三十七年冬に水谷不倒の許に一旦二百円で話があつたものである。鹿田へは同年十二月七日に話が来、翌三十八年一月二十一日に話が整い、それをわずか五日後の一月二十六日に大阪書籍商組合事務所にて「大方売尽」したという。親しい顧客に対する取引にて、日記からその面々を確認するならば、今井貫一、永田有翠、幸田成友、水谷不倒、小山田松翠、内藤虎次郎(湖南)、磯野秋渚、濱真砂、水落露石となる。こうした人々こそが鹿田二代古井、三代餘霞のもとに集う、この論の表題に言う鹿田松雲堂サロンを形成した面々に他ならなかつた。

サロン形成

人々の集うきつかけと成つたのには、ひとえに「書籍月報」という目録発行の果たした役割が大きい。それというのも、上方における従来からの商慣行に倣うならば、人々が集う「場」なども必要としなかつたのである。

翁の話に、昔時は商売が仕易かつた。大阪の書林は天満の天満宮に日参をする、境内の茶店で同業者が数名落合ふと誰か何々の本を持つてゐないか、代銀は何奴かと尋ねる、そこで商談が出来れば、先づ今日の衣食に事を欠く心配は無いから、後は銘々蟲屑の御得意の家でも廻つてその日を過した、といはれたことがある。(幸田成友寄稿のち表題「書籍目録第百号に題す」、初出「古典聚目」第百号、大正十四年十一月発行)

対して目録発行による古書販売の場合には、一つしかない書冊を欲する顧客であれば、発行してからのほんの数日間に、店に赴き買い求めざるを得ない。いきおい愛書家^{ドクター}ほどに、目録刊行のたびに松雲堂の店頭へと走ることになる。そのことは限られた期間に愛書家達が一同に介することを容易にしてくれよう。いまでも東京などでは毎週金曜に古書会館で古本市がなされ、その午前中に集う人々などには定連が多いと風聞するが、そうしたなかになにかしらの連帯感^{コンパニオンシップ}は生まれゆくのではあるまいか。

自分の在阪当時は目録の印刷が出来上ると、松雲堂ではその一部を神棚に供へ、それから小僧や出入の若衆惣掛りて市内は配達し、市外は郵便に附した。自分の如きは目録を手にするると大急ぎで一覽し、欲しいと思ふ書物に記号を付け、それを懐中にして同店に駆付けたものだ、古本は一部切である。注文の前後によつて勝敗が決するのであるから、勢ひ同店に駆付けざるを得ない。同じ思で濱和助、永田好三郎、水落露石、打越竹三郎、水谷不例、内藤湖南、磯野秋渚等の先輩知己諸氏が松雲堂の二階南向の小座敷へ続々として詰掛ける。内藤翁の如きは平素朝寝坊であられるのにこの日に限つて殊にお早い。(同右)

幸田成友の語る「松雲堂の二階南向の小座敷」こそが、そうした愛書家の集うサロンを形成していくことになる。それは、多くの顧客にとってかけがいのない場所に他ならなかった。幾人かがそのことを証言してくれている。

○販売目録が出ると多数の顧客が先を争ふて店に押寄せることは今も昔に変わらぬが、明治時代古典熱がまだ熾んでなかつた時でも、新目録を持って松雲堂の平賀源内の油絵（註・現神戸市立博物館蔵「西洋美人図」のこと）の掛つてある二階を通ると、定連の愛書家が多数詰めかけて市が栄へてゐるのであつた。その頃は此定連が期せずして集つたのを機会に、古井翁や当時の若主人先代餘霞君を取り囲んで盛んに典籍趣味談が交はされて半日を過すのが常例であつた。（「古典聚目」第百十九号所載、大阪府立図書館長今井貫一卷頭言、昭和八年九月）

○三十三年以後三十九年まで、再び大阪朝日新聞に執筆して大阪に在り。此頃よりや、古写古板の本などあさるやうになり行きたれば、松雲堂との関係もますます深く、又幸田、濱、水落、永田、小山田、打越諸君などの如き、同臭味の人も出来て時々会合し、京都より島、富岡二氏など来り加はることもあり、大阪図書館も創設中にて、本あさりに多事なる時代を来し、面白き暗闘の其間に生ずることなどありて、すべて此の一群は松雲堂を中心として活動したりしなり。（内藤虎次郎寄稿文 鹿田松雲堂「古典聚目」第百号、大正十四年十一月）

○目録発売の日、松雲堂楼上偶然の会合は、自分にとつては大いなる利益であつた。席上の談話は一切書物に関することのみで、列席諸氏はそれ／＼専門の立場に於て、書物に対する趣味批判は

決して他人の追隨を許さぬものである。それ等諸氏の談話を実物の書物を前にして聴聞するのであるから、その利益はいふまでもない。自分が書物に対する趣味、書物に対する多少の知識は実にこの席上に於て諸氏から啓発せられ、口授せられたものが多い。（幸田成友「書籍目録第百号に題す」）

四元弥寿氏は、三代餘霞に可愛がられたお孫さんであるが、戦前に存した間口五間（約九メートル）奥行き二十八間（約五十メートル）という安土町の店舗兼住宅二階の思い出の一つとしてこのサロンのことを述べている。

店の奥の続きで二つある座敷にも店の二階は本棚がいくつもあつて、そこに広い応接間がありました。そこがお得意さんのサロンみたいになっておりまして、本の交換やお話をされるんですね。「だれそれさん、見えてませ」とか「私は何月何日に鹿田に行つてる」「そんなら私も行きます」「鹿田に行つたらだれかいてる」いうようなことやつたんでしょね。

目録に載つてゐる本は一冊ですので取り合いになつたりしますと、「お話し合ひしていただかないとしようございまへん、どうぞよろしうお願いいたします」いうて番頭さんは引つ込みますの（笑）。本のお好きな方は、ご互いにどの本を持ってなさるといふのはよくご存じですので「あの本と交換しましょ」やとか「珍しい本を見せてもらう代わり譲ります」とか、うまいこといくらしいです。

お客さんには船場の方も多かったです。本は買わんと毎日続き読みに来はる方やら（笑）、学者さんで朝に晩にお越しになる方やら。たいがいは「目録に載つてたあれまだおましたか」言うて

来はるんですね。(四元弥寿「弘化元年開業の鹿田松雲堂と戦前の安土町のこと」、大阪都市協会「大阪人」59巻11号・平成十七年十一月)

古典籍を販売する場に「同臭味の」人々が寄り集い、「典籍趣味談が交はされて半日を過」し、幸田成友の場合と同様に多くの人が「自分が書物に対する趣味、書物に対する多少の知識は実にこの席上に於て諸氏から啓発せられ、口授せられた」ことが多かったことだろう。その輪のなかに鹿田松雲堂二代古井翁や若主人であった三代餘霞が居たのである。

こうした集いが商売上のつきあいなどという垣根を越えることもあったことは言うまでもない。そうでなければ、「大塩中齋、尾崎雅嘉、萩原広道、木村兼葭堂、山川正宣等諸名家の薦事を行ひ、建碑を首唱し、数々図書展覧会を開きて埋没せる古典の真価を発揚」(幸田成友「鹿田静七翁小伝」)するような行事を推進することなどかなわなかったのではなからうか。その意味でも、巻頭言からこのかた「古典廃すべからず」「豈古典を棄て、何れにか之をもとめん」という鹿田松雲堂の姿勢は一貫していたのである。

風雅の交誼

— 大阪史談会・保古会・古書交換会・井会

こうした風雅の交わりは、鹿田松雲堂書店内だけにとどまることなく、様々な形で拡大していったようである。特に「大阪史談会」はその魁というわけではなさそうだが、一つの契機ではなからうか。

そもそも「大阪史談会」とは何か。肥田皓三氏のご研究(『芸能懇

話」二〇号、平成二十一年十二月)を踏まえつつ述べるなら、幸田成友が大阪市史編纂主任として大阪市役所に赴任したのが明治三十四年五月。市史の材料となる史料蒐集が皆無であることに驚き、当初は編輯材料の蒐集からはじめざるを得なかった。着阪早々その事業に協力を惜しまなかったのが鹿田松雲堂であり、そのために結成したのが「大阪史談会」だった。成友の発言を引用しておく。

自分が大阪市役所に赴任したのは明治三十四年五月で、東京に居る中から松雲堂の名前は知つてゐたので、着阪早々静七翁を訪問し、それ以来翁の歿くなられるまで即ち明治三十八年八月まで僅か五ヶ年ではあるが、随分頻繁に翁と接触した。これは自分の仕事—大阪市史の編纂につき史料の買入又は借出に翁の援助を得なければならぬことが色々あつたからで、翁は自分と一緒に大阪史談会を發起して、毎月一回安土町の書籍商集会所に開会し、又市史編纂掛で三十五年と三十六年とに展覧会を催した時は、二度とも先達となつて書籍物品の借入や陳列に奔走せられた。そんな関係で実際の年数は少いが、自分は割合に深く翁を知つてゐると信ずる。(幸田成友「書籍目録第百号に題す」)

史料の買入のみならず、松雲堂に集う諸名家とも成友は親交を結び、史料の借覧謄写を繰り返してゆく(今日、大阪市立中央図書館にその蒐集資料が残されている)。市史編纂事業を円滑に進めるべく、明治三十四年十月十二日に書籍商組合事務所において、成友と鹿田静七が幹事となつて大阪史談会が発会したが、その予告が大阪朝日新聞明治三十四年十月九日に「大阪史談会の創立」と題して記事となっている(『五代のあゆみ』五八頁参照)。ちなみに昭和十一年九月二十五日発行「大阪史談会報」第三卷第六号掲載「大阪史談会沿革誌」によれ

ば、「明治三十四年、菊地侃二氏の知事時代、府立天王寺中学校に第一期の史学同好者会を開催したのを発祥とする」とあり、ほぼ同じ時期に同名の会が発足している。大変紛らわしいが、発起人を異にしているため別の会と考えておくべきか。幸田成友の関わるこちらの発起人は鶴原定吉、村上龍平、藤澤南岳、小林利恭、小松原英太郎、平瀬亀之輔、平沼淑郎の七名。幸田と鹿田が幹事を務め、当初、事務所を北区玉江町の幸田成友方に置かれた。

まだ私が大阪にゐた頃、大阪市史編纂主任として幸田成友氏が来た。大阪の古老濱和助を始め水落露石、永田有翠、木崎愛吉、鹿田古井その他の人々の好書好古のグループがあつて中学卒業近い私が最年少の一員だつた。来阪した幸田氏は早速このグループに加はつて史料蒐集に努めた。(中井浩水「山樵亭夜話」(六)『重箱』と『蛇の目鮓』、「あまカラ」三十九号二八頁 昭和二十九年十一月)

若き中井浩水の記憶を辿るとき、成友来阪時には既に好書好古のグループが形成されていたことが確認される。名の伝わらぬこうした会もまだまだあろう。今回の考察では触れていないが、古書展覧会が、明治三十二年頃から、東西両都市に一時盛んに行はれたことも関連しているに違いないが(水谷不倒『明治大正古書価の研究』)、この考察は今後の課題として残しておきたい。

永田有翠の弟、小山田松翠「家兄の古考癖」(『下萌』第六号・有翠氏追悼号・大正十年十一月)に拠れば、この「大阪史談会」に飽きたらず発足したのが「保古会」であつたようである。

幸田成友氏の大阪市史編纂のため来阪と成り、毎月かならず書籍商組合事務所に於て、大阪史談会の催しがあり、各自参考書の

持寄りであつたのである、それからそれにもあきたらず、暑中のあつき頃、少雨にも拘はらず、北郊の中村別邸に於て、二三種の自慢半分の持寄り展覧会が出来た、保古会といふのであつた

「自慢半分の持寄り展覧会」という保古会は「ほうぐかい」と読む。その経緯を記した藤澤南岳『不苟書室日録抄』より抜萃する(同書二十九丁裏(三十一丁表))。

二十日。雨。濱鹿田二氏。欲扱徴古会。借北郊中村氏 以開筵焉。已牌。軽車衝雨以会焉。席上所展。春章画菊童子。清長画美人。共彩搨本。：略：此日来会者泉嵩山称由次郎。濱真左古。岡本撫山。亀岡清谷。田中某。打越晴亭。小山田松翠。永田有翠。安井霞郊。永野桂雄。鹿田古井。関根一郷。杉山竹丈。午餐小酌。共議会名。遂保古会。会字東音多読為加伊。訳買。乃邦音保字具加伊也。亦善謹哉。

「濱、鹿田二氏、徴古会を扱めんと欲して」とあり、濱真砂、鹿田古井兩名による発起であることも知れる。『保古会出品目録 癸卯上下 甲辰全』複製(中尾松泉堂、昭和五十七年一月)によれば、「保古会出品目録 癸卯上」(内題明治三十六年保古会出品目録之上)の巻頭に、七香齋主人こと南岳先生によつて「去歲夏の頃より四五の友人自家の藏品を持ちよりて共々に品評賞賛し会を保古と名づく」と記される。第一回から六回については未詳ながら、第七回が会日(明治三十六年)一月廿日、会所築地竹式楼、幹事藤澤南岳、幸田成友、課題は「新年」であつた。毎回会場を替えてながら(途中書籍商事務所が続く)、「元禄時代」「七夕」など月並の課題を取り決め、それにまつわる書籍や絵画等を持ち寄つて展覧するのである。会に集う者も、例えば濱真砂、岡本撫山、打越晴亭、小山田松翠、永田有翠、木崎好

尚、平瀬露香、水落露石、加賀豊三郎、水谷不倒などの名前を確認することができる。いずれも鹿田松雲堂の定連客であった。月並俳諧などでは景物が付きものだが、目録からはそうしたことは伺えず、むしろ課題に即する文物を集め展覧に供することを競っていたようである。おそらくその集いは次に挙げる「古書交換会」同様の雰囲気をもったものであつたらう。

「古書交換会」については、水谷不倒『明治大正古書価之研究』に「大阪の古書交換会」と題して述べられている(同書一二〇頁)。「古書交換会」の第一回は、明治三十七年七月九日、南久宝寺町の水落露石の別邸で開催。案内をもらい出席した水谷不倒に拠れば、集つた連中は幸田成友、水落露石、濱和助、内藤湖南、富岡謙二、鹿田静七、永田有翠、水谷不倒、小山田松翠他二名と、これも鹿田松雲堂で顔なじみの面々であつた。古書の市場は正式には「交換会」と呼ばれる。自店で不要の品を持ち寄り、他店が出品した品を持ち帰るので「交換」会であるが、これは商売としてのそれではなかつた。

最初であるから、勝手が分らず、狼狽しては笑の種を蒔きあちこちから口を出す、本の交換よりも、贅辨のとりやりで大騒ぎ、頗る愉快な会であつた。之が病みつきで、更に同志を募り、同月二十四日第二回の交換会を開くといふ熱心ぶり、此時は東区島町加賀翠溪君の新宅で催うされた。出席者は前の顔ぶれに、加賀君をはじめ、関新吾、須藤南翠、武藤鉄斎、青木恒次郎君等が、新たに加入した。何しろ暑い盛り、午後三時から始め、十五六人が饒舌を続けるので、其暑いことつたらない。(略)同三十八年も引続いて開催したが、中には繁忙な人もあり、二回は多きに過ぎるといふので、月一回となつた。四月の例会には、幸田君が会

主となり、氏の住宅、兵庫県武庫郡住吉村へ招かれた。(略)幸ひ好天氣に恵まれ、大阪からは、水落、濱、永田、小山田、鹿田、予と同勢六人。京都の方は遠いので小山君一人のみ。併し一騎当千の兵ばかり、小勢にも屈せず、気焰を揚げること日頃に十倍。それに幸田君は左党の驍将であるから、酒は飲み放題、弁当は御持参のものを開き、先づ腹を拵へ、午後早々交換会をはじめたが、出品は一向不振、勿論皆遊ぶ気であるから、少なきを厭はず、よい頃加減に片付けて、雑談に花を咲かせてゐる所へ、須藤南翠、木崎好尚の両君が、後れ走にやつて来た。サアもう一度やり直せといふ、一たん片付けた本を、又出して再入をはじめるいま、三代餘霞日誌から関連記事を補足しておこう(『五代のあゆみ』一八二頁参照)。

七月九日 幸田水落両氏発起にて古本素人打揃交換会をなす事となり 今日水落氏宅にて初会催す 中々盛会にて来会者十数人 此後毎月挙行の集とす 終て内藤富岡幸田氏諸氏と馳走になる 十一時帰宅此夜大暴風雨 隣家田村井に諸場よりトタン屋根裏へ飛来り大暗闇にて終夜寝らず

「七月」廿四日 古書交換第二回を加賀氏宅にて挙行 前回に倍し来会者も多く愈々盛なり 次回内藤氏と予と幹事となる

鹿田松雲堂主人が参加しながら「最初であるから、勝手が分らず」と言うのだから、東京の取引方法を真似てのものと思される。「贅辨のとりやりで大騒ぎ、頗る愉快な会」「出品は一向不振、勿論皆遊ぶ気であるから、少なきを厭はず、よい頃加減に片付けて、雑談に花を咲かせてゐる」と、まるで宴のごとくである。同好の人々が自慢の本を持ち寄って、大いに遊んでいたのであつた。おそらく先々章に触れ

た西鶴本をめぐる仲間内での取引などでも、険悪なやり取りというよりは、同様の雰囲気に満ちあふれていたことが、こうした記事から想像しうるのである。

もう一例紹介しておきたい。大正七年から発足した「井会」なる会である。この会についてはあまり指摘されることがないが、「下萌」第一号（大正八年四月刊）に「どんぶり会」なる一文が掲載される。

我党の間に「どんぶり会」といふ好事の会が昨年から出来てゐます。それは秘蔵の書画なり器物を一定の課題の下に持寄て展覧し互ひに研究もし鑑賞もしようといふのです。会場は会員の自宅で順番に催すことになつて時間は午後早々から夜へかけて開かれます。ですから晩食は贅沢に走らず鰻井位のところですよ。約束東「どんぶり会」の名も即ちこれから起つたのです

会員は水落、和久、打越、山田、高安（注―吸江）、砂原、永田、鹿田、中井等の諸氏でまだ一度も出席はされませんが出品もし会員の一人として渡辺氏、少し遅れて豊田氏も入会されました。第一回は昨年の六月二十三日、上福島の和久正辰老人のお宅で開かれました。何しろ口開けのこと、ともかく老人の御蔵品拝見といふ約束で雨を冒して相会しました（下略）第二回は同じ昨年の十月廿三日、裏新町の砂原馨石氏のお宅で催されました。課題を定めたのは此第二回が始めて「凡董に関するもの」といふ定めでした。（下略）その後は下萌句会だの、古書交換会、やみ汁会などが打つゝいたためこの会の方は休みの形で又本年の初春一月の廿五日、初天神の宵に内淡路町の山田新月氏の御宅で第三回が催されました。この日の課題は「西鶴に関するもの」でした、

（略）（N生）

「秘蔵の書画なり器物を一定の課題の下に持寄て展覧し互ひに研究もし鑑賞もし」「会場は会員の自宅で順番に催す」と、まるで「保古会」同様の会と言える。こうした会の存在は記録が残されない限り、人々の記憶に残るものではない。おそらく同好の交歓の会は数多く存在していたことだろう。蔵書家同士が仲良く交歓し合った時代を私はゆかしいことと思う。個人で同志を募り、会員向け雑誌を刊行していく風潮が未だ到来していなかった時代において、鹿田松雲堂の場合のように、書店に集い、談合し、会の企画が持ち上がる。その時、負担を均等にしようと幹事を毎回交代し、会場も個人宅を巡るなどの工夫がどうやらなされていったのではあるまいか。どんぶり会などが「晩食は贅沢に走らず鰻井位のところですよ。約束」としたところなどは、それ以前の会の反省の上に成り立っていることを如実に物語っている。いずれにせよ、それらも長くは続かなかつたようで、興っては消えてゆくのである。

サロンのゆくえ

集散離合は免るべからざる数で、濱、水落、永田三氏は逝去し、内藤翁は京都に、水谷氏と自分とは今東京に居る。目録発行当時のやうな会合は再び繰返すことが出来ない。（幸田成友「書籍目録第百号に題す」）

明治三十四年に来阪した幸田成友は市史編纂後、明治四十三年に帰京していった。明治三十二年の冬に大阪毎日新聞に入社した水谷不倒も明治三十八年の暮れに大阪を去り、東京へと戻って行く。濱真砂こと和帮助の亡くなったのは明治四十四年一月。水落露石が大正八年四

月、永田有翠は大正十年九月であった。

昭和十七年六月に金尾文淵堂から刊行された伊達俊光『大大阪と文化』には「故水落露石氏の事」と題する小文が載る。大正五年十一月に大阪の俳人露石こと水落庄兵衛氏を訪れた当時の訪問記である。

話はいつしか主人の書物道楽に移った。「古書交換会も此頃は一向振ひません、とんと珍本も出ず、出ると又滅法高いものですからな、鹿田(静七)あたりはもう日本内地に掘出物がないので近頃は支那まで買出しに行くやうな訳ですが、支那は流石に出たら中々多量にあるさうで、一時は鹿田の図書目録が出るとわれ一と店頭で競ひ合ったもので、遠方からは電報で注文すると云つた位な騒ぎでした。其時分は目録も極秘密に刷り、得意先へは同じ日に、それも晩方に配る事にしておりましたが、私はこの目録の出るのを待ち兼ねて、出ると直ぐ宵の内に記号をつけておいて翌朝起きると早速あたふたと鹿田の店へ駆けつける。するともう幸田君(成友)や、内藤君(湖南)などの顔が見えて、思はず鉢合せをすると云ふ始末でなか／＼盛んなものでした。然し今日ではもう鹿田の目録も全く顧みられなくなりました。それに水谷君(不倒)はとつくに東京へ行かれたし、幸田君も、内藤君も当地にあられないから、私達好きの仲間は大分減りました。この節は当地の若い人達の中でもこの春美人の妻を迎へて評判になつてゐる加賀君(正太郎)や鉄屋の岸本君(吉左衛門)など、随分と趣味のある人もありますが、一向私等の仲間にはは入つてくれませんが注目したいのは「一向私等の仲間にはは入つてくれません」との一言である。かつての仲間が一人減り二人減りし、残された面々にかつて存した遊び心や克己心、向上心などといったものも沈静化してゆく

時、ありていに言つて、若い世代にとつて、既存の集いへ何かしら魅力を感じるものが残つていたのだろうか。世代間格差といつてしまえばそれまでだけれど、若い人は互いに研鑽し、時には馬鹿な発言も許される環境を求めてゆくものだろうと思う。

鹿田松雲堂サロンは、常に同じ定連客によつて構成されていたわけではあるまい。客人は移ろい、また松雲堂主人も世代交代をし、そうした無常のなかで、人々の集う指標としての存在価値をある時期まで持ち続けたのであつた。

このうち大正の末年に、若手の蒐書家と、古本屋のなかで向学心のある、商売熱心な人たちで「書史会」というグループが結成される。そこには鹿田四代文一郎も参画しており、浮き沈みを重ねながらも、書籍を巡る同好の人々の繋がりは、人は異なれど継承されてゆく。とは言え、その性格も少し異なりを見せている。この点は本考察の範疇を越えるため、別に考えてみたい。

もたらされたもの

総じて、今回素描してきたサロンや同好の会の存在は、何をもちたしてくれたのだろうか。

たとえば永田有翠という人物を例にとろう。鴻池銀行重役の令息にして、稀代の文庫「永田文庫」の主である。大正十年九月に歿くなつてゐるが、その文庫は「二十坪ほどの蔵に階下階上ともぎつしり」(読売新聞昭和三年八月三十一日、鹿田静七談「紙魚の跡 滯尽しの巻(三)」)であつたという。「表紙や外題のあんばいを丹念にあらためて丁数を仔細にしらべ、扉や奥附に十分目を通してからでなければ、

評価を軽々しくはしなかつた、それと同時に、値組次第では、いかな虫でもしみでも落丁でも、端本でも軟かくない側でも苟くも本と名のつく本は、片端から手に入れてゆき、「古書交換会の常連で、買ひ上手で、いつの会でも、ズツシリ提げて来て、又変つた代呂物をズツシリ提げて帰る人だつた。一枚も札のはいらぬ本でも、有翠君だけは、札を入れずに次へ廻すことはしないで、落ちるべき筈でない札値で落す名人だつた」と木崎好尚は回顧する（「その道楽」「下萌」第六号、大正十年十一月）。この永田有翠の功績の第一は、書籍を惜しげもなく見せていた点であろう。まだ壮年の頃にあたる明治四十二年十一月廿七日の読売新聞「趣味」欄に「京雀」と「江戸雀」と題する記事が掲載されているが、関西唯一の蒐集家として永田有翠のことが紹介される。その一節が次のようなものであつた。

年一度の虫干の外は何時も蔵の中へ仕舞ひ込んで出さないけれども特志な研究志願者ならば氏はこれほど大切に仕舞ひ込んである珍書をもどし／＼貸し与へるしました紹介状を持つて行く人には面倒も厭はず蔵の扉を開いて一々見せる事をも辞さない。然う云ふ具合だから氏の門を叩く人は足をも絶たないと云つた風にも係らず氏は喜んで之れを迎へて談論に花を咲かせる事がある

これこそが書縁というものであろう。古きものにゆかしき思いを持つものを快く受け入れてくれるのだ。同様の発言を弟の小山田松翠も、また中井浩水も述べている。

○かくて近松浄瑠璃もの、西鶴草紙もの、演劇もの、俳諧書ものなど徳川時代の軟文学書として、何んでもござれと努力したものがら、各方面より集収し来る事夥しきものであつた、(略)さりながら蒐集した所の古書画器物など、倉庫深く蔵し込むにてもな

く、同好者には展観し若し亦た借覧するものあれば、快く貸したものであつた、是等など美点と云へば言えやうか、少しく売名宣传的の嫌厭もあらんかなれども、所々方々の展覧会に出陳なしたる事も、蠹魚の住居と成し自他共に観ず相楽まざるよりは、遙に善事であつたであらう。（家兄の古考癖）「下萌」第六号、大正十年十一月）

○なほその上に君は乞ふ人には快く蔵の借覧を許した、君の恩沢によつて研究の歩を進めた人も少くない筈、私も君の蔵書をこれまでに随分見せて貰つた、既にこの一事でも君は立派な蔵書家ではないか、有翠君はこの意味に於いて尊敬すべき貴いものを持つてゐた人であつた。（蒐集と読書）同右）

「古井翁や当時の若主人先代餘霞君を取り囲んで盛んに典籍趣味談が交はされて半日を過した経験は、書物を単に財産として隠すものとするよりは、典籍趣味談を交わすものとして活かすことを選んだのである。その点だけでもゆかしき蔵書家と言える。今日の我々も、この恩恵に授かつた当時の研究者たちの考察を経て、古典研究を進めていることは忘れてはならないだろう。

※ ※

さて、東京に戻つていった幸田成友や水谷不倒によつて、東京の集いへも影響を及ぼした別の例を紹介して今回の考察を終えたい。

東京の古書を巡る好古の集いについて、明治四十四年一月十八日の東京毎日新聞には「奇抜なる珍書会 会員は知名の文士騷人」と題する記事が掲載されている。

愛書家の一団集古会の林若樹氏は昨年一月下谷東黒門町二書肆文行堂主横尾勇之助氏を談らひて別に一会を組織したるが会員は愛

書家中にても錚々の聞ある安田善之助、加賀豊三郎、岡田紫男、
幸田^{成友の誤り}露伴、内田魯庵、赤松範一、吉田久兵衛、三村清三郎、大野
酒竹氏等にして露伴^{成友}氏が玉屑会と命名し毎月一回文行堂樓上に会
し居るが会の趣向は頗珍妙な行方なり

こののちの文章で、会員各自が持ち寄った秘蔵珍本の端本をバラし
て互に分け合う会であることを紹介している。ちなみに集古会は、
明治二十九年十一月、考古と歴史を愛する趣味人の集りである集古会
の会報『集古會誌』を創刊。のち『集古』と改称し昭和十九年までは
ほぼ半世紀にわたって蔵書印譜や花印譜・商牌集の連載物、稀観書の紹
介、伝記資料の翻刻、会員書誌の随筆などを掲載し続けた趣味の会で
ある。その分科会として創られたのが文行堂玉屑会であった。この記
事を日記に貼り保存した内田魯庵は、次のような関連する逸話を記し
ている。

集古会か何かの折偶然幸田と林と岡田と余とが文行堂の二階で落
会つた時、幸田が大阪では鹿田が会主で端本を分つた事があつた
と話したのが抑もの初めで、夫ぢやア東京でも初めやうぢやない
かと、折から同座した文行堂を煽り立つて初めた(内田魯庵「日
記」明治四十四年一月十八日条、『内田魯庵全集』別巻五七八〜
五八一頁、ゆまに書房)

つまり大阪の鹿田松雲堂が会主の集いで端本を分け合うことをしてい
たが、帰京した幸田成友の発言を契機に、東京でも試みられていった
ということになる。この玉屑会第一回の集まりについて、三村竹清
の日記では次のように記される。

けふは零本をバラして頒つ会の第一会也。人員十名板式の参攷に
もなり面白き会也。これは去八日集古会の帰りに文行堂に打より

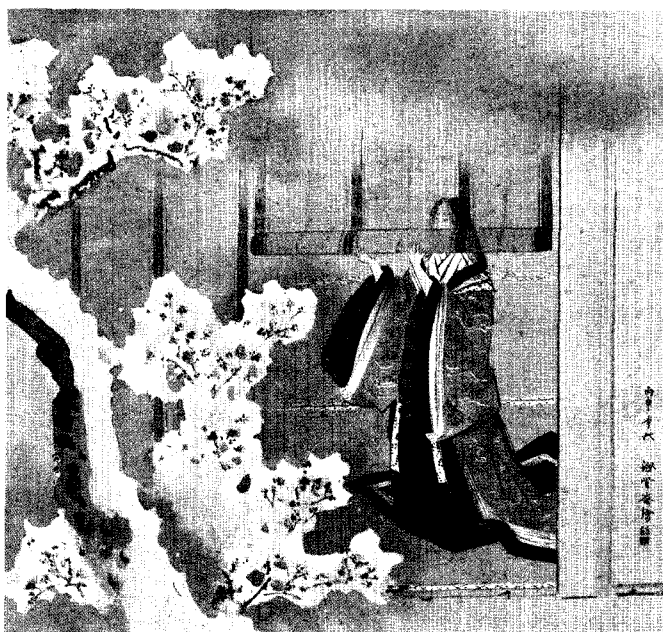
て定めしにて大阪鹿田にては早くやつてゐたる也。会名を何とせ
んとて林氏片鱗、予は撰英捨芳、内田氏玉屑望蜀寸惜等之字を出
し、遂に玉屑にきめる。内田氏自ら不滿意といはれしも先つこれ
にする。(三村竹清日記研究会「不秋草堂日曆」(一)・「演劇研究」
第十六号、平成五年三月)

また会の主催者文行堂横尾勇之助「日誌」でも触れる。

(明治)四十三年の春上京した時大阪から引上げられた幸田成友
君の話から、内田魯庵林若樹君と私と加はつて、大阪でやつてお
る、零本をこわして分けて、本の標本を蒐つめる会を思ひたつ
た、大阪でも鹿田君を中心とし、東京では立安君を中心として四
十四年一月に第一回分を終了した。玉屑といふ表紙と玉屑会印と
いふのが私が刻した。たしか三回位はつづけた筈だ。(文行堂横
尾勇之助述、三村清三郎写「店頭日記」(書誌学月報別冊2 平
成九年八月刊)

幸田成友の東京へ戻ったことが、端本・零本を用いての本の標本作り
を図らずも東京へともたらずことになったのであった。先に引用した
東京毎日新聞記事では「中には随分得難き珍本もありて会員の満足一
方ならず追々は会費を激増して大阪方まで斬捲り鹿田一派の鼻を明か
さん計画ありとぞ」と締め括り、対抗意識をむき出しにしていた。
「反故漉きなほし」の原料に充てられ、つぶし棄てられる運命にあつ
た端本に価値を見いだした鹿田松雲堂のアイデアは、斯くして東京へ
も波及していった。それは「風化の由る所を考んと欲せば古典廢すべ
からず 百芸の道を明めんとすればそれ豈古典を棄て、何れにか之を
もとめん」とした二代古井の姿勢に相通ずる発想に他ならなかつたの
ではあるまいか。

本稿の一部に、科学研究費補助金基盤研究C「明治期における近世戯作の享受に関する研究」(研究代表者山本和明・研究課題番号23520264)の研究成果を利用した。



清少納言之図（藤村琢堂画 春曙文庫蔵）